

研究ノート Research Note

令和七年早春の「大船渡山林火災」を考える

村井 宏

元岩手大学大学院連合農学研究科教授

岩手県は、全国的な視点に立てば、北海道に次ぐ林野火災の大規模発生地として、古くから知られていた。たまたま林野庁林業試験場に就職した私は、岩手県の好摩に所在する同所東北支場防災研究室に勤務し、永らく森林火災や森林環境を研究していた佐藤正室長の配下で、森林火災の研究を分担させて頂いた。それがご縁で静岡大学や岩手大学に転属した後も、林野火災関係の調査や試験を行い、ギリシャや中国の被災地まで出かけ、仲間とともに研究する機会を得た。その中で、美しい紺碧のエーゲ海に面したペロポネソス半島の山火事を調べ、大規模土砂から濁流が海を汚す情景も光景も目の当たりにした。

岩手県でも林野火災で焼失面積が最も大きかったのは、1961年の「三陸フェーン大火」で、二万六千haを焼いている。次いで、1983年には久慈市で千八十五haの被害が発生した。両災害調査に、林業試験場に勤務の私が責任者として当たった。これらの成果は農林省林業試験場報告に掲載されており、その一部は私の学位論文（北海道大学）となっている。その後、春季の乾燥期に山火事被害はあったが、幸いにもそれほどではなかった。14年前三陸沿岸地帯は、東日本大震災で津波を経験した地域ではあるが、その復旧対応で精一杯で山火事被害は、忘れかけていたことであろう。

岩手県の森林火災は、西側の多雪・多雨の奥羽山系では、融雪で地盤が湿っているが、東側の北上山地は少雪・少雨で、特に春季は風が強く乾燥している。落葉広葉樹類や地表草本類が枯れたままの時期は、たまたま原野や耕地の整備時期と重なり、焚火や火入する機会が多い。このような活動が森林火災の発生の原因となっている。強風による立木の摩擦による自然発火は、ごくまれであると考えてよい。換言すれば、森林火災は農林作業や家屋周辺の火入れに関わっている。

この度の2025年2月下旬からの大船渡市周辺の森林火災は、当初、近年のように小規模でおさまるかと思われたが、地元消防の力ではおさまらず、近県や自衛隊のヘリコプター等の支援を受けても、中々セーブできず1週間経過し、3月9日の降雨で漸く鎮火状態となった。延焼面積二千九百ha、これは大船渡市の約29%に相当する。一般住宅等施設約二百個所に被害を与え、一名のご老体の地元民の人命も失っている。被害総額も未定だが多額に達するであろう。予想もしなかったが、1983年に発生した久慈市の森林火災被害に接近する規模となつた。

日頃、岩手県農林水産部では、林野火災発生を警戒し予防に努力している。林野火災がこのところしばらく小規模で、些か関係者は安堵感もあったと思われる。当初、2月25日に

発生した陸前高田市内の森林火災は思いがけない場所で発生したが、その発見は速やかであり小規模、短期間に消火させることができた。地元ではほっとされたことであろう。

続いて発生した大船渡市の森林火災は、気象条件や乾燥した林野の状況から、予想以上に規模が拡大してしまった。県内の消防車や自衛隊の活動や県外の支援を無視する如く展開したのは、乾燥気味で雨が最近は少なく、林野が乾ききっていたことに他ならない。大船渡市は「温量指数」が86以上で、未満の宮古市や久慈市と異なって、落葉広葉樹林帯と異なり、暖温帯広葉樹林に該当している。高田・久慈よりも寒さが厳しくないが、12月から3月まで、降水量は50mm以下である。2mm以上の雨があったのは、2か月ぶりであった。このような立地条件であり、山地を覆う森林の管理や整備は、人手不足もあり地元の支援が得難くなっていたと考えられる。

この度の山林火災の経験から、今後の発生予防に参考にすべき事実が多いように思われる。多くの方々の指摘と合致すると考えられるが、これまでの私の調査研究を通して、発生環境から、消火対策、予防措置まで要点を述べてみる。

(1) 北上高地から太平洋岸までの県内の気象環境は、春先の1~3月は乾燥季に入る。多雪湿潤な奥羽山系と異なり、林野火災に見舞われる機会が高い。冬季を含むが、この季節は地元住民はもとより、外来者にも注意と情報が必要である。

(2) しばらく大規模山火事がなかったのは、安全になったとは考えずに、むしろ、発生危険度が高まりつつあると考え、期間中重点的な林野巡回活動や区域はもちろん、広域対象に、可能な機動力を導入し、配慮されることを期待したい。

(3) この度の山火事の延焼の仕方を見ると、スギ人工壮齡林の厚く堆積した落葉層に着火した後拡張し、下枝から樹幹を経由し、林冠層に展開し拡大している事例が多い。したがってこのような林況は燃えやすいと認識し、間伐を遅れないようにすること、また、できれば林床の手入れをしたいものである。

(4) 防火対策としては、既存の防火線の維持管理と集落への新設、可能であれば新たに多目的な簡易山道を新設したい。これらは近辺集落や林野や諸施設を防護できる。現政府が掲げる国土防災施策にも含められるであろう。

(5) 山火事の跡地は、準平原の場所は別として、大船渡地区では急斜面が多い。林床部分まで火が入ったところは、火災後風水食の危険地であり、最後まで確認すべきである。先の三陸大火や久慈市の火災跡でも大規模な侵食地が発生し、

下流に土砂が流出し被害を与えた。この度の被災地でも二次災害の発生危険度が高いので、緊急な跡地対策が必要である。

(6) 対策としては、この地方にはこれまで海辺にはアカマツ・クロマツが内陸にはスギ・ヒノキが主体に植栽され（一部天然生），海崖にはタブノキ、エゾイタヤ・シナノキが主である。今後、針葉樹類を抑え落葉広葉樹類をできるだけ導入したいものである。火災や津波に耐えるには、以前より防火に強い林相を仕立てる努力が必要であろう。

(7) 二次被害の予防のためには、荒廃林地の侵蝕防止に、林床が焼けて裸出した急傾斜地を優先に、表土の流出を抑止しつつ、むしろ張りによる常緑草（常緑のクリーピングレッドフェスクやクローバー類）やヤナギ類（イヌコリヤナギ・オノエヤナギなど）による早期の緑化がふさわしい。これらが定着後、跡地に適樹の高木類を導入する。

被災後、関係機関や消火活動に当たった皆様のお陰と、およそ1週間ぶりの降雨で、何とか鎮火させることができた。誠にご苦労様でした。県民の一人として心から感謝している。これから復旧対策は容易なことではないが、宜しくお願ひしたいものである。

私個人は何も協力できなかつたが、日本プロ野球からアメ

リカ大リーグのドジャースに入団した大船渡高校卒の佐々木朗希投手は、契約金のなかから、郷里に多額の見舞金一千万円と寝具五百組を寄贈している。きっと被災市民の力になることだろう。心から敬意を表するとともに、新天地における今後の活躍を祈念してやまない。（2025年3月脱稿）

引用文献

- 1) 村井 宏 (1972) 林野火災が地表流下、浸透および土砂流出に及ぼす影響、水利科学、16(2): 51-76.



写真-1 大船渡の林野火災跡地（2025年10月5日、吉崎真司氏撮影）

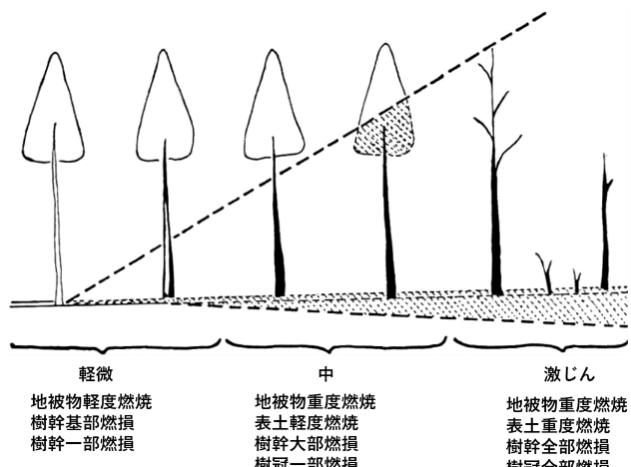


図-1 火災における典型的な林地の被災図¹⁾